

◆森真紀 選

昨年、『うちの猫は俳句が大好き』という本を、土曜美術社より出版しました。一平師匠、毛利先生、トムと三人の呑んべえが、名句を巡ってくりひろげる対話劇です。今、読者の輪が静かにひろがっているらしく、嬉しいかぎりであります。

トム「日本では、古池に蛙が飛び込むと水の音がするんだよって、きのうアメリカのママに電話でおしえてあげた」

毛利「そしたら、ママはなんと？」

トム「あたりまえではないかって。なんでそんなあたりまえのことにおまえはおどろいてるのか。まえからおもってたことだけど日本にいておまえのあたますこし変になったみたいだって」

師匠「ま、いうだろうな」

毛利「ほかにはどんなお話、してさしあげたんですか？」

トム「日本では、柿を食べるとお寺の鐘が鳴るんだよって」

毛利「そしたら？」

トム「これもまえからおもってたことだけどおまえのあたまが変になったのもたしかだがそもそも日本という国が変なのではないかって」

師匠「ま、いうだろうな」

トム「それから、日本では、蟬が鳴くとしずかになるんだよっていったら、とにかくはやく帰ってこいって」 (中略)

トム「で、さんざんあーだらこーだらおこったあとさいごに、いま住んでるのはどんな家なのかと聞くので正直にこたえた」

毛利「なんていったんですか？」

トム「咳をしてもひとり」

毛利「そしたら？」

トム「なんにもいわなかった。ただ……」

毛利「ただ？」

トム「泣いてるみたいだった」

《以上本文より》

この対話劇の全編には、次のようなパロディ句を二百数十句散りばめています。

閑かさや居間にしみ入る蟬の声

(閑かさや岩にしみ入る蟬の声)

「別れ話」という前書を付けてみました。

古池や蛙飛び込む水ノート

(古池や蛙飛び込む水の音)

古池の水面を「水のノート」と表現してみました。

むざんやな座布団下のキリゴトス

(むざんやな甲の下のきりゴトス)

たまに、罪もない虫に死んでもらう事もあります。

乗り越して枯木の中を帰りけり

(葱買って枯木の中を帰りけり)

終電車での実体験です。他のパロディ句もほとんどが実体験です。

逢いたさも中くらいなり君江ちゃん

(目出度さもちう位なりおらが春)

何十年ぶりかの同窓会。ぼくはいったい初恋の君江ちゃんに逢いたいのか逢いたくないのか？

柿くへば種がにゆるにやり法隆寺

(柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺)

種のまわりにくっついているあのにゆるっとしたやつ。ほんとうに実より美味しいですね。

沢庵のこりゝゝとして寂しかりけり

(雉子の眸のかうかうとして売られけり)

独身者のつぶやき。独身者、これからも増えつづけてゆくのでしょうか？

「俳人。このふた文字をほどいてみる。人非人。人であってひとに非ず。ひとでなし。ろくでなし。俳句とはろくでなしのひとりごとだったんですね。古今の名句もじつはろくでなしたちのひとりごと、そうおもえば気が楽になる。そしてひとは気が楽になるとついその作品や作者をいじりたくなるらしい。あちらからもこちらからも、戯れ句、もじり句なるものが、わらゝとあらわれてくるのであった。《プロローグより》」ということで執筆したのが、『うちの猫は俳句が大好き』です。

以上、自著について、思いつくままに書かせていただきました。わたしは閑<sup>ひま</sup>なのかもしれません。

森真紀（もりまさのり）：一九五〇年、東京生まれ。作家、詩人。ハロージャ  
ンボ音楽祭ブランプリ受賞など作曲家としても活躍。滑稽俳句協会テーマソ  
ングの作詞作曲。著書に『悪妻盆に帰らず』『日本語ごっこ』『詩集 初夜の風景』  
など多数。千葉県在住。

❖ 『うちの猫は俳句が大好き』（土曜美術社）

二九〇頁、定価二千円（税・送料別）

お問合せ連絡先 〇九〇-一八一五-七〇〇三